

冒険者にはよくあること

おもみつぎ

ここは冒険者の酒場。冒険者たちが出会いと別れ、そして飯と酒を求めて集まる場所。昼は依頼や仲間集めの受付所として、夜は酒場として運営されている。今は夜の、そろそろ日付が変わろうかという時。冒険や依頼、迷宮から帰ってくる冒険者は大抵夕方頃から晩飯頃がピークのため、酒場内は少し閑散としている。それでも外の街の静けさに比べれば明るかった。そんな酒場の一角に二人の冒険者がいた。

一人はシーフの男。背は冒険者としてみると高くはないが、シーフとしてみると少し平均よりは上だろう。細身ではあるが服の隙間から見える肉体は戦闘職のように引き締められたものだった。シーフとは冒険者の役割上の名前で、泥棒などの盗みを食い扶持にしている者ではない。シーフは冒険中の偵察などの斥候であり、迷宮でのマッピングや畏外し、鍵開けなどを行う。冒険者としての花形である戦闘をする者達ではないが、必ず必要とされる人材である。彼の服装はシーフであることを示すかのように、鎧や魔導着などではなく軽装で、町中でも市民たちのなかから浮くことはないだろう。足先だけは畏や悪路を行くため少々ゴツイブーツとなっているがそれだけだ。シーフの男はツمامミとして出された枝豆を、

全て豆と皮に分ける暇つぶしをしていた。男の目は疲れ切ったものだった。

対してもう一人の男は、絵に描いたような魔術師であった。ぶかぶかのローブを纏い、魔術師側の机に木製の杖が立てかけられている。杖の他に詠唱用の魔術書詰まったりユックが床に置かれていた。フードに埋もれかけている顔は若く、幼さすら感じられた。彼はシーフの向かい側に座り、同じようにツمامミの枝豆を、全て豆と皮に分けるという作業をしていた。こちらは少し顔に朱が入り、喉の奥がかゆいかのように口をモニヨモニヨさせている。

「なあ」

「……………」

シーフの呼びかけに、魔術師は答えず枝豆を分け続けた。

「なあって」

魔術師の唇は結ばれたままである。

「そろそろ話してくれよ。俺を呼んだ理由。相談したいことがあったんだろ？」

「誰にも話さないって約束できる？」

魔術師がようやく口を開いた。シーフの枯れた枝のような声と違い、魔術師の声は男の臭さを感じさせないものだった。

「内容によるさ。人殺しとかだったら衛兵と組合に突き

出すしかないからな」

「ちがわい！」

「悪い悪い。ようやく声が出てきたな。元気そうではなかったよ」

魔術師はシーフに乗せられていたことにハッとしました。

「じゃあ犯罪じゃないんだろ？ なら話してくれよ。悪いことをしてるってんじゃないんだ」

しかしその言葉を受けて魔術師は考え込んでしまった。シーフはその反応に少し視線を光らせるも、枝豆剥きに視線を戻した。シーフが次の枝豆に指を伸ばすも、皿の上には皮しかなかった。そこでシーフが声を上げる。

「姐さん、塩とスプーンちょうだい」

「はい」

酒場の給仕の男性はシーフの声に返事をした。長髪でシーフと魔術師を足して二倍したような体格の男性。給仕服から伸びるバキバキの腕がスプーンとソルトミルを丁寧に運ぶ。それを横目で見ながら、魔術師が口を開く。

「……その食べ方やめたら」

シーフは剥いた豆を塩で味付けしスプーンで口に運んでいた。

「別にいいだろ。犯罪じゃないんだから。何より俺としてはちゃんと中身を確認しないと怖くてね」

そう言いながら口に運ぶ。目を閉じ咀嚼する。そして声にならない歓喜の悲鳴を上げ、スプーンをプルプルと震

わせた。

「昔はお前たちみたいに食べてたんだけどね。虫が入ってたことがあってさ、それ以来こっちになった」

「そうですか……」

「ちゃんとしたところから仕入れているし、魔術探知もしているのに……しょうがない子ねっ」

「悪かったね。姉さんの前以外ではしないよ」

「もう！ この子ったら。早く寝なさいよ」

そう言っただけで給仕の男性は厨房の方へ戻っていった。

「さて、俺としてはこれを食べ終わって奢ってもらったら帰るんだが。話してはくれんのか」

「奢るって……まあいいけど。本当に誰にも話さないでよ」

「わかったわかったって。なんなら契約魔法でもするか？」

「いや、勿体ないよ……。いや、した方がいいかも……」

そう言っただけで魔術師はリュックから魔術書を取り出そうとする。それをシーフが手を振って制す。

「悪かったって、話しやしないよ。すまんすまんふざけすぎた」

魔術書をしまい、リュックを床に下ろす。

「実は……」

「好きな人ができたんだ……とか？ まあなんだ気を張るなって。別に食って殺すわけじゃないんだから」

「な……なんでわかって」

「え？」

シーフはキョトンとした顔をしている。対象的に魔術師はわなわなと震えている。顔はかなり赤みがかかり、机に手を付け少し立ち上がっている。目ははつきりとシーフの目を貫いていた。シーフはその反応に驚き両手を前に落ち着かせるように振りながら答えた。

「まっ……まじか。悪かった……いや良かったじゃないか！ 好きな人ができた、うん！ 良いことだ。俺たちがしない冒険者において、金や自分の命以外に生きる目的や仕事する意義が見つかることはとても素晴らしいことだ！」

シーフは言葉を早口でまくしたてる。人のデリケートな部分を茶化したことに気がついたのだ。

「おっおーい！ 姐さん！ こいつに一杯くれてやってくれ！」

「ばっばか！ 誰にも話さないって言ったじゃないか！」「わりい……つい」

シーフは少し落ち着きを取り戻した。魔術師もそれを見て自分が席を立っていることに気が付き、座り直した。

「いや、まさかそんな話だったとはな。俺はてっきり……お前のパーティでの揉め事とか金銭トラブルとか、そういうのだと思ってたからよ。ごめんな」

「いや、謝らないですよ。僕も……言い方が悪かったしさ」

魔術師は下を向いたまま体を小さくしていた。その姿はどうも男というよりも少年のようであった。シーフはそれを見て少し頭をかくと口を開いた。

「で、相手は誰だ？ いや、言いたくないやいぞ」

「……その……」

「ん？」

魔術師はまた口ごもった。ははーんとシーフはいたずらっ子のように笑みを浮かべた。

「当てるやろうか。お前の交友関係はそこまで広くないからなあ。えっと魔術学校の幼馴染だろ？ ギルドの受付嬢、あと魔導雑貨のお姉さんに、宿の清掃担当の新入り。パン屋の姉ちゃんも良いよな。あとは……昼の給仕組とかか？」

シーフは次々と魔術師の交友関係にいる女性を挙げていく。シーフはそうやって魔術師の反応を見て、宝箱の鍵を開けるときのように針金を動かしていく。しかしシーフの予想と違い、魔術師は望んだ反応をしなかった。そこでシーフはあることに気がつく。そして脅すような低い声で問う。

「……もしかしてパーティ内か」

「なっ……なんで」

明らかに魔術師は反応をした。ビクツと肩を震わせ視線が様々な方を向く。

「パーティクラッシュャーにでもなるつもりか？ お前。」

冒険者のパーティにそんな感情持ってくるな。パーティ内の人間関係のもつれは、すぐ連携や運営に影響が出る。それが迷宮内や依頼中、いや町内であってもだ。人が死ぬぞ」

「わ！ わかってるよ……それくらい」

そう言って魔術師は黙り込んでしまった。床に視線が固定されている。

「パーティ内の誰だ？ 俺はお前のパーティには所属してないから細かいことはわからんが……」

魔術師は答えない。

「確かお前のとこのパーティはお前含めて四人だったよな。戦士が一人と弓使いとお前。えっと確か名前は……」  
シーフが記憶の中から魔術師のパーティのプロフィールを掘り返していく。魔術師はまるで死刑台に登らされている気分だった。

「斧使いのオークに、槍使いのリーザ、そして弓使いのクソガキエルフのシード……ん？ あれ？」

シーフは質問するときの威圧する声でなく、唐突に疑問の声をあげた。頭に手を当てながらぐるぐると考え出す。

「……人間の女がいねえ」

「……一応、斧使いの人は女性だよ。名前はアキ」

「あいつが女な訳ねえだろ。姐さんよりでかいんだぞ。どっちにしろオークの親戚だよ」

「アキがいたら殺されてたよ……。あと最近もう一人魔

術師が入った」

シーフは宝を見つけたかのようにその言葉に飛びついた。

「そうか、じゃあそいつに心を奪われちゃったんだ」

「まさか！ あんなおばあちゃんに！」

詰問の緊張から解放されたのか、魔術師は控えめにだ  
が笑った。シーフはそれを見ますます疑問の迷路に嵌  
った。

「どんな奴なんだ？ 教えるよ」

「はは、多分知ってるよ。ちよつと前まで酒場の近くの  
ポーション店にいたおばあちゃんだよ。名前は長かった  
から覚えてないけど……フォンさんだったかな。なんで  
も魔術師免許の更新とかで迷宮に入る必要があるんだっ  
て」

「へえ、あの婆さんがねえ。実はエルフで老けづくりし  
てたりとか？」

「まさか。逆にそっちだったらよかったかな。おばあち  
やん連れての迷宮内の移動が大変だったから」

「じゃあ結局誰なんだよ、お前が好きになっちゃったや  
つ。パーティ内じゃないのか？」

シーフは降参するように両手を上に挙げ、そう言った。  
魔術師の方も覚悟を決めたのか、大きく息を吐くと重た  
そうに口を開いた。

「実は……その………リーザなんだ」

シーフは止まった。机の上の枝豆が入っていた器のよ

うに、食べ終わったあとの食器のように数秒だけうごかなくなつた。そして動き出すと、額に汗を浮かべながら魔術師に問いかけた。自分の認識を確認するために。

「り、リーザって槍使いの？ さっき話してたやつ？ それとも……」

「そう、僕の所属しているパーティの槍使いリーザのこと。それであつてる」

「……いやいやいや」

シーフは顔の前で右手を仰々しく振つた。

「いや、うそだろ？ だってあいつは……」

ペしんとシーフの頭から音がなつた。魔術師とシーフを足してもより大きい手。姐さんがシーフの頭を叩いていた。姐さんが口を開ける。

「さつきから聞いてりゃあ、あんたねえ、人の恋路を突つつき過ぎよ！」

「……いつてえ……いやまあそうだけど、こいつはよお」

「だつてもなにもない！ ここの支払いはあんたがしな！」

「ちよつとちよつと待てて！ だって……だつてこいつの言ってる槍使いのリーザってのはよお！」

シーフは魔術師を指さしながら言った。

「リザードマンなんだよ！」